



「国際シンポジウム 東アジア世界と儒教」発表者と協力者（2004年7月）

有緣千里來相會

千里山前作道場
閩西台北共商量
群賢此會緣殊淺
東亞儒門流澤長

日本平成十六年九月中旬閩西大學主
催東亞世界與儒教研討會台灣大學東
亞文明研究中心協贊之中日韓學者歡
聚大阪千里山下敬題成語小詩以誌
其盛

余英時



有縁千里来相会——刊行にあたって

吾妻 重二

一

本書は二〇〇四年九月十六日、十七日の二日間、関西大学で開かれた国際シンポジウム「東アジア世界と儒教」(International Conference on the Interaction and Confluence of East Asian Confucianism)における発表論文を掲載したものである。このシンポジウムを開催に至った経緯や開催の趣旨についてはシンポジウムのプログラムにおおよそのところを記したので、まずはそれを、一部手直ししたうえで掲げておきたい。

本学(関西大学)は二〇〇一年度に国立台湾大学との学術交流を発足させ、二〇〇三年一月に歴史学系の黄俊傑教授を文学部招聘講演者として迎えました。これらを契機とし、黄教授との話し合いの中で国際シンポジウムの開催を計画するに至りました。当シンポジウムは、日本の研究者と、国立台湾大学を中心とする著名な研究者が協力し、東アジア世界と儒教をめぐる討論と情報交換をおこなうものであり、日本や韓国、ベトナム史の研究者にもご参加いただくことで、より広いパースペクティブをもつよう企画しました。開催形式は本学文学部が主催し、国立台湾大学東亜文明研究中心が協賛します。

東アジアにおいて儒教が果たした役割が大きいことはいまでもありません。政治、経済、法律、文学、宗教、儀礼、民俗習慣、家族、学術、教育、倫理学、哲学、科学技術などのさまざまな分野にわたる巨大なパラダイムとして存在し続けたばかりか、さらに中国本土から日本、韓国・朝鮮、ベトナムを含む東アジア世界に影響を与え、「東アジア世界の文化」をかたちづくってきたのです。このことは、かつて漢語が東アジア諸地域における知識人のオフィシャルな共通言語となっていたことを想起すれば十分でしょう。

しかし「総合学芸」としての儒教の内容とその役割は、じつはまだ十分に明らかになつたとはいえません。これは、近代において儒教が前近代的なものとして批判の対象になつたという事情が大きく関係しています。もちろん、近代ヨーロッパから発したさまざまな価値観は私たちにとつてきわめて大切なものですが、しかし、それと同時に、各地域・民族のもつ文化特性を理解することも必要であり、それは今日ますます重要な度合いを増しています。いいかえれば、世界の一元化が進む中で、多元化の視点も必要になってきているのです。シンポジウムを通じて諸地域・諸民族にわたる儒教研究をうながし、ヨーロッパ文化とは異なる東アジア文化の特性を、より明確なものにしたいと考えるのです。

シンポジウムでは、プリンストン大学名誉教授の余英時先生、大阪大学名誉教授の子安宣邦先生に特別講演をお願いしました。中国の学術思想について多くの業績をあげてこられた余先生、日本思想を斬新な切り口から解析してこられた子安先生のご講演は、各研究者の報告とともに、東アジアの伝統と現代について貴重な示唆をもたらしてくれることでしょう。このたびの会議が、今後の研究をいっそう促進することを願っています。

このように、当シンポジウムのねらいは儒教の思想・文化を東アジア世界という地域的広がりのもとに考察することにあつた。中国・韓国・日本・ベトナムにおける儒教の史的展開を考察することで東アジア文化の特性を再考し、この地域の過去と現在を照射するのに役立てたいと考えたのである。

現代社会にあつて、儒教といえはすぐ「倫理道德」というイメージが先行してしまふが、右に述べたように、そのような狭く堅いイメージによつては覆い尽くせない豊富な内容を儒教はもっている。思想体系というのとも違う。「総合学芸」とか「パラダイム」（思考の枠組み）といった言い方をしたのはそのためである。そうした儒教のもつ広範な内実とその歴史的展開を説明することは、研究者にとつて依然、重要な課題といふべきであろう。もちろん、私たちは儒教を礼賛するつもりはないし、儒教の復興を企てようとも思わない。そうではなく、東アジアという地域はかつてどのような文化をもつていたのかを、政治イデオロギーや狭隘なナショナリズムの磁場から離れて再検討したいと考えたのである。実際のところ、儒教を抜きにして中国・韓国・ベトナム・日本の過去を語りうるはずがなく、そして私たちの過去を知ることにはまた、現在をより良く知ることにもつながるはずである。こういったことはシンポジウム開催にあつて特に表だつて議論したわけではないが、私たちに共通する暗黙の了解であつたといつてよい。

さて、本書は講演と発表をシンポジウムの進行に沿つて配置してある。まず「特別講演Ⅰ」として余英時「政治環境からみた朱子学と陽明学」を置いた。これに続く余英時論文は講演と同じタイトルであるが、これは講演のためにあらかじめ執筆された論稿であり、双方を読んでいただくことが理解を深めるのにつながると考え、これらとともに載せることにした。

韓学者歎聚大阪千里山下、敬題成語小詩以誌其盛（日本平成十六年九月中旬、関西大学、「東亜世界と儒教」の研究会を主催し、台湾大学東亜文明研究中心、之を協賛す。中日韓の学者、大阪千里山下に歎聚せり。敬んで成語・小詩を題して以て其の盛んなるを誌す）

余 英 時

少し説明を加えれば、「有縁千里来相会」（千里に縁有り、来たりて相い会す）という詩題は、各研究者が遠くからはるばる参集したと、関西大学の所在地が吹田市千里山であることの双方をかけている。「千里の道のり」を遠しとせずして「千里」に集まったというわけである。アメリカ、台湾、韓国在住の諸先生はもちろんそうであるが、ベトナムで実地調査中だった岩月先生は、わざわざ当シンポジウム参加のために一時帰国してくださった。また「道場」というのは、真摯な討論の場であることをいう。

本シンポジウムを成功裏に終えることができたのは、講演を快諾していただいた余英時、子安宣邦両先生をはじめ、各参加者のご協力があったからこそであり、また、通訳者の方々が尽力してくださったからである。ここに改めて厚く御礼申し上げる次第である。

シンポジウムは、本学文学部が主催し、国立台湾大学東亜文明研究中心が協賛した。全体の実行責任者には吾妻があたり、台湾側は東亜文明研究中心副主任の黄俊傑先生が窓口となった。また、諸手続きを滞りなく処理してくださった本学国際交流センター、文学部事務室、ご支援を賜った本学学長・河田悌一先生、文学部長・芝井敬司先生、本書の刊行を担当してくださった東方書店コンテンツ事業部主任の阿部哲氏にも、心から感謝申し上げたい。

二〇〇五年三月

を視野に入れた研究は、今後も引き続きおこなっていく必要があるわけだが、本書がそれを促進する一つのきっかけになってほしいと思う。

なお、シンポジウムのおりには、互いのコミュニケーションを促すために、中国語の発表は日本語に、日本語の発表は中国語に訳した。訳された論文は、本書では日本語訳を載せ、あわせて訳者名を掲げてあるが、中国語訳は本書には載せていないので、この場を借りてその訳者を紹介しておく。すなわち、子安宣邦・岩月純一論文は本学大学院生の蔡麗玲氏が、土田健次郎・崔在穆論文は本学非常勤講師の張麗華氏が中国語の通訳にあたった。また当該文集の編集にあたり、講演・論文の日本語訳はすべて吾妻が目を通し、文体を統一するようにした。

三

さて、本書巻頭に余英時先生による題詩の写真の掲げておいた。これは余先生が帰国後に寄せてくださったもので、良い記念としてここにとどめておきたい。

有縁千里来相会（千里に縁有り、来たりて相い会す）

千里山前作道場

千里山前 道場を作すな

関西台北共商量

関西・台北 共に商量す

群賢此会縁非浅

群賢ミ此に会するは 縁浅きに非ず

東亜儒門流沢長

東亜の儒門 流沢長し

日本平成十六年九月中旬、関西大学主催東亜世界与儒教研討会、台湾大学東亜文明研究中心協賛之、中日

*本シンポジウムの開催にあたり、関西大学国際交流助成基金から助成を受けました。また、国立台湾大学東亜文明研究中心からも援助を得ることができました。感謝いたします。